

F-6 Take hatred and turn it into love : 「余剰 take 構文」の記述的研究

平沢慎也 (東京大学 非常勤講師)

1. イントロダクション

英語では turn hatred into love 「憎しみを愛に変える」の意味で take hatred and turn it into love とも言える。このように [take+NP_i +and+V+PERSONAL PRONOUN_i...] (e.g. take hatred and turn it ...) という形式をとり、単に V+NP_i ... (turn hatred ...) と言っても真理条件的に等価である (ため take が余剰的である) 構文を「余剰 take 構文」と名付け、この構文について記述を提示する。特に、take と and が余剰 take 構文で担っている役割は、take と and が持つ他の意味・用法とどのような関係にあるのかを考える。

2. 本発表と先行研究の関係

発表者の知る限り、本発表で注目しているものに類する take の用例を分析した論文は Hopper (2002, 2008) だけである。Hopper (2008) は Hopper (2002) に含まれていた take の分析を修正、拡大したもので、今のところ最も新しい Hopper の take 観を反映したものと考えられる。

Hopper (2008) は純粹に形式的な観点から「take NP and 構文」を定義する (p.261)。その形式を満たす take は自動的に無意味な代動詞 (p.262)、「ダミー動詞」(p.264)であり、take NP and VP 全体で (2つではなく) 1つのイベントを表すとされる (p.259)。この発想に基づき、take hatred and turn it into love に類する例だけでなく、took the handkerchief and put it into the pocket of the robe (p.262) や took a candle and lit it (p.272) のような例も1つのイベントを表すものとしてカウントされている。発表者の考えでは、後半の2例では take は無意味なダミー動詞などではなく、「手に取る」の意味が十分生きている。これに連動して、イベントの数を2と数えることも十分可能であると考え。おそらく Hopper は take の意味を必要以上にゼロ化している。

Hopper (2008) が take NP and 構文の定義に合致する take の用例すべてにおいて take の意味はゼロで一定であると考えていることは、take の用例の連続体についての捉え方にも現れている。具体的には、Hopper はイベント数が1であると断言できる take NP and 構文からイベント数が2であると断言できる take の用例まで連続体をなしていると考えているのだが、その連続体は、take の意味の濃さに連動する連続体ではなく、上の定義からの形式的逸脱の度合いに連動する連続体として想定されているのである。たとえば、and ではなく but が用いられている用例や、and 以降の動詞句が複数ある用例では、イベントの数が1とは数えにくくなると考えている (pp.276-7)。この連続体の様々な地点で take の意味がどうなっているのかについては議論されていない。

発表者は take の意味に関心を持っている。余剰 take 構文において take の意味は本当にゼロなのかを真剣に考えたい。ここが Hopper の考え方と発表者の考え方のもっとも大きな相違点である。

3. take の意味の希薄化

3節では、余剰 take 構文の take に文法化 (意味の希薄化) が起こっていることを指摘する。

3.1. 希薄化を示す事実 1

take の他動詞構文に現れないとされている主語・目的語の組み合わせも余剰 take 構文には現れる。Norvig & Lakoff (1987) では人間を主語にして*take a smell 「においを嗅ぐ」と言うことは不可能とされているが、余剰 take 構文では、「においを嗅ぐ」という意味ではないものの、人間+take+smell の組み合わせが可能である。以下の例は、におい付き絵画の展覧会の出品者の発言である。

- (1) We **took** a smell and paired it with an image to see an effect.

(<http://www.daily49er.com/artslife/2017/10/04/art-is-the-new-smell-and-works-well-with-color/>)

においを絵と組み合わせたらどうなるかやってみたんです。

3.2. 希薄化を示す事実 2

「手に取る」の意味の take の単純他動詞構文に現れる主語・目的語の組み合わせであっても、余剰 take 構文では「手に取る」の意で解釈されない。以下の 2 例はそれぞれロープ・卵を既に手に持っている人の発話である。「手に取る」の意味ならば I'm going to という未来形式は用いられないはずである。

- (2) a. And now, ladies and gentlemen, I'm going to **take** this rope ... and ... cut it in half ... with this pair of scissors.

(*Bewitched*, Season 1, Episode 16, It's Magic)

皆さん、今度はこちらのロープをですね…半分に切ってしまいますよ…こちらのハサミで。

- b. I'm going to **take** this egg: which is obviously a chicken egg and splatter it against the wall.

(Joseph McNair Stover, *Jelly Beans: Scenes*)

この卵をね...このどこからどう見ても鶏の卵って卵をね...壁にばちゃっとぶつけてやんのよ。

3.3. 希薄化を示す事実 3

take NP_i という部分が持つ意味を、take+NP_i +and+V+PERSONAL PRONOUN_i ...全体の意味と独立には—たとえば「NP_i を対象とする」や「NP_i を材料として使う」のようには—指定することができない。

- (3) a. In the old theory (3.1), a lexical rule **takes** the syntactic argument structure of a verb and transforms it into a different argument structure.

(Steven Pinker, *Learnability and Cognition*)¹

以前の仮説 (3.1) によれば、語彙規則は動詞の統語的項構造を別の項構造に変換する規則である。

- b. ?? This rule **takes** a syntactic argument structure of a verb, not a semantic structure.

この規則が作用する対象となるのは、動詞の統語的な項構造であって、意味構造ではない。

- c. ?? What this rule **takes** is a syntactic argument structure of a verb, not a verb itself.

この規則が作用する対象となるのは、動詞の統語的な項構造であって、動詞自体ではない。

- (4) a. Professor Stern has made a career out of **taking** seemingly useless things and turning them into

¹ この例では a lexical rule (語彙規則) を人間に見立てる擬人化が働いていることに注意されたい。

brehtaking artworks. I'm sure you've seen many of them. And I'm happy to tell you that he's done it again.

スターン教授は、一見使い物にならないように見えるものを材料として、そこから見事な芸術作品を作ることを生涯の仕事としてきました。皆さんも教授の作品をこれまで何度も目にしたことがあるでしょう。そしてなんと、今回もまた、彼はやってくれました。

- b. MC: Professor Stern has made a career out of turning seemingly useless things into breathtaking artworks. I'm sure you've seen many of them. And I'm happy to tell you that he's done it again.

Reporter: *What did he **take** this time?*

司会者： スターン教授は、一見使い物にならないように見えるものから見事な芸術作品を作ることを生涯の仕事としてきました。皆さんも教授の作品をこれまで何度も目にしたことがあるでしょう。そしてなんと、今回もまた、彼はやってくれました。

記者： 今度は何を材料にしたんですか？

4. take の意味はゼロか

4節では、3節で指摘した余剰 take 構文の take の意味の希薄化が完了まではしておらず (take の意味が完全にゼロにはなっておらず) 「手に取る」の意味がある程度生きていることを2つの観点から示す。

4.1. take の意味がゼロではないことを示す議論 1

余剰 take 構文は、「手に取る」の意味の take が take+NP_i +and+V+PERSONAL PRONOUN_i ... という形式を取った場合と似た性質を持つ。まずは余剰 take 構文の性質から見よう。

余剰 take 構文が自然に響くためには、V スロットを埋める動詞が NP_i への働きかけを含む動詞である必要がある。このことは、状態動詞や作成動詞がこの構文に参与できないことから分かる。

- (5) a. I love my wife. b. *I **take** my wife and love her.
- (6) a. My wife resembles Taylor Swift. b. *My wife **takes** Taylor Swift and resembles her.
- (7) a. My mother wove a new sweater every week.
 私のお母さんは毎週新しいセーターを編んでくれました。
 b. *My mother **took** a new sweater and wove it every week.
- (8) a. Do you really think one can write a dark novel after 20 years of publishing hilarious pieces?
 コミカルな作品を20年間にわたって出版してきた作家が、ダークな小説を書くなんてことが可能だと本当に思っているのですか？
 b. *Do you really think one can **take** a dark novel and write it after 20 years of publishing hilarious pieces?

しかし、余剰 take 構文の V スロットを埋める動詞は、NP_i への働きかけを含意するだけでは不十分で、

「NP_iをいったん準備段階に持ち込む」というフェーズが存在するような動詞である必要がある。

(9) テーブルマジックで、手品師が客に話しかけたという状況で：

a. Would you knock the table three times?

テーブルをコン、コン、コンと三回叩いてもらえますか。

b. *Would you **take** the table and knock it three times?

(10) a. 娘が運動会の徒競走で一等賞になった瞬間を父親が撮影したという状況で：

He photographed his daughter's first winning moment with his iPhone.

彼は娘の初勝利の瞬間を iPhone で写真におさめた。

b. *He **took** his daughter's first winning moment and photographed it with his iPhone.

(10b) で動詞 photograph を余剰 take 構文で使うのは不自然なのは、娘が徒競走で一等賞になる瞬間は父親にとってコントロール可能なものではなく、撮影の準備段階に持ち込むことができないからだと考えられる。以下の場合には、食べ物を撮影の準備段階に持ち込むことができるため、同じ photograph でも、余剰 take 構文での使用が認められる。

(11) Sin Azucar, or “without sugar,” is a photographic project from Spanish photographer Antonio Rodríguez Estrada. The idea is as simple as can be: Estrada **takes** packaged foods and photographs them alongside the amount of sugar they contain.

(<https://www.fastcompany.com/3067170/see-just-how-much-sugar-is-hiding-in-the-food-you-eat>)

Sin Azucar 「砂糖なし」というのはスペインの写真家アントニオ・ロドリゲス・エストラダが始めたフォト・キャンペーンの名前だ。発想はとことんシンプル。食べ物1パック分を、そこに含まれているだけの量の砂糖と横並びにして、写真におさめるのだ。

以上のデータを踏まえると、余剰 take 構文において、後半の V+PERSONAL PRONOUN_i ... の部分は「NP_iに働きかける」ということを表し、前半の take NP_i の部分は「NP_iをその働きかけのための準備段階に持ち込む」というフェーズを焦点化しているの自然だろう。

次に、「手に取る」の意味の take が take+NP_i +and+V+PERSONAL PRONOUN_i ... という形式を取った場合について考えてみよう。

物理的な用法に関して言うと、someone **gets** something とは違って someone **takes** something は someone の意志で物体を手を取ることを表す。I got a book. は意図的かどうか曖昧だが、I took a book. は意図性に関しては曖昧ではない (Mahpeykar & Tyler 2015)。そして、人間が意図的に物体を手を取るのには、それに対して何らかの働きかけをする準備をするためであることが多い。以上の2点から当然の帰結として予測される通り、以下の例 (12) のように、take NP が働きかけの準備段階を焦点化し、and VP がその働きかけを焦点化するような形で、take+NP_i +and+V+PERSONAL PRONOUN_i ... という形式が用

いられることがよくある²。

(12) a. She **took** a grape with both hands, closed her eyes, and bit into it. (Andrew Kaufman, *The Tiny Wife*)

妻はぶどう一粒を両手で持って、目を閉じ、かぶりついた。

b. He **takes** the papers and glances down at them.

(Emily Giffin, *Baby Proof*)

彼は書類を受け取り、そこにさっと視線を落とす。

こうした例では、take ... で表されている「物体（ブドウ、書類など）を手取る」という行為は準備段階に相当し、and 以降で表されている「かぶりつく」とか「さっと見る」とかいった行為が本当にした行為に相当すると言える。

このように、余剰 take 構文の持つ「準備段階→働きかけ」という描き出し方は、「手取る」の意味の take が take + NP_i + and + V + PERSONAL PRONOUN_i ... という形式を取った場合にも見られるものであり、余剰 take 構文における take の意味が完全にゼロになっていると考えるのは妥当でないと思われる。

4.2. take の意味がゼロではないことを示す議論 2

余剰 take 構文の take が「手取る」の意味を完全に失っているわけではないと考えるべき根拠の 2 つめは、余剰 take 構文を使っている最中の話し手が物理的に手を取るようにジェスチャーを行うことがあるということである。(13a) の動画ではつまむ動作、(13b) の動画では勢いよくつかむ動作が見られる。

(13) a. You can **take** that 10 minutes and move it to any part of the day and have the same benefit.

(https://www.ted.com/talks/bruce_feiler_agile_programming_for_your_family)

その 10 分をですね、一日のどこか別のところに移し替えてやれば、同じ効果が得られるんです。

b. Now, if we can learn those values from at least some influences on the Right, if we can **take them and incorporate them**, maybe we could do a little trade. (https://www.ted.com/talks/lessig_nyed)

こうした価値観を、右派にいる影響力ある人たちの少なくとも一部から学ぶことができれば、つまりこうした価値観を自分たちのものにして取り込むことができれば、ある程度のギブアンドテイクが可能になるでしょう。

5. and についての考察

ここでは、余剰 take 構文の and が、動き出し段階を明示する VP₁ and VP₂ 構文にあらわれる and と同じものであること—言い換えると、余剰 take 構文は動き出し段階を明示する VP₁ and VP₂ 構文の一種であること—を論じる。英語では、VP₂ という行為・変化の動き出し段階、初動フェーズを VP₁ とし

² (12) の and 以降は手取るという行為を行わなくてもできる行為であり、take ... の部分が存在するかないかが真理条件的な意味での差を生むため、(12) は余剰 take 構文の例ではない。

て明示したうえで VP₂ を後続させる VP₁ and VP₂ 構文が用いられることがある。このとき VP₁ の部分はあってもなくても真理条件的にほぼ等価であることが多い。

(14) a. He looked at her and she wiped her eyes and stared at him before **turning and going back to the living room**.
(Raymond Carver, “Popular Mechanics”)

b. 学生訳4 修正案

彼は女を見て、女は涙を拭い、彼をじっと見ると居間に戻った。(柴田 2006: 90)

c. before turning and going back to the living room の turn が訳されてませんが、まあここは訳さなくてもいいかな。回れ右する、ということですけど、日本語ではいちいちこれ言わない。僕は「彼に背を向けて」と一応訳して [...] いますが、turn っていうわずかな一音節、まあ turning で二音節なので、訳すとどうしても、簡単な言葉にやや注意を喚起しすぎの感はある。だからこの学生訳みたいに抜いてしまうというのも一つの手かもしれないですね。(柴田 2006: 90)

(15) She [...] went on crying into her hands. I didn't know how long it was going to last, but once she pulled herself together, I assumed that she would **get up and leave**.
(Paul Auster, *The Book of Illusions*)

彼女は [...] 両手に顔を埋めて泣きつづけた。これがどれくらい続くかはわからなかったが、いずれ気を取り直したら大人しく出ていくものと私は思った。(柴田元幸 (訳) 『幻影の書』)

(16) The news made them **sit up and take notice**.
(平沢 2016)

その知らせを聞いた途端に、彼らははっとした様子で話を聞き始めた。

余剰 take 構文の「準備段階に持ち込む」というフェーズも、and 以降の行為の動き出しのフェーズであると言えるので、余剰 take 構文は上の VP₁ and VP₂ 構文の一種だと言える。

6. 参考文献

平沢慎也 (2016) 「仕組みを理解することと、丸ごと覚えること—sit up and take notice から学ぶ—」『東京大学言語学論集』(37) 71-90.

Hopper, Paul (2002) Hendiadys and auxiliation in English. In: *Complex sentences in grammar and discourse : Essays in honor of Sandra A. Thompson, Joan Bybee, and Michael Noonan* (eds.) Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins, 145–173.

Hopper, Paul (2008) Emergent serialization in English: Pragmatics and typology. In: Jeff Good (ed.) *Language universals and language change*, 253–84. Oxford: Oxford University Press.

Mahpeykar, Narges and Andrea Tyler (2015) A principled Cognitive Linguistics account of English phrasal verbs with *up* and *out*. *Language and Cognition* 7, 1-35.

Norvig, Peter and George Lakoff (1987) Taking: A study in lexical network theory. *Proceedings of the thirteenth annual meeting of the Berkeley Linguistics Society*, 195-206.

柴田元幸 (2006) 『翻訳教室』東京：新書館.